

教室 SLA と使用言語

英語 I (共通教育言語科目) の受講調査結果から

Examining SLA and Classroom Language in First-year English Classes at Kanazawa University

結城正美

Yuki, Masami Raker

Abstract

This research explores students' perception of first-year English classes at Kanazawa University, examining how they feel about the language used in the classroom (i.e., Japanese monolingual, Japanese/English bilingual, or English immersion), the instructor (native English speaker or non-native), and the correlation of the two. As a preliminary inquiry, a questionnaire was distributed to a sample student population. The result shows a strong preference for bilingual classes as well as an opportunity to take classes taught by native and non-native instructors. Also, comparing students' response in bilingual and monolingual classes taught by Japanese instructors, students in the bilingual class show a more positive response to non-native instructor's use of English and a more open-mindedness towards accented English. Considering these preliminary results, this paper suggests the importance of English classes conducted mainly in English by a Japanese instructor, for its possibility of transforming students' attitudes towards English as a lingua franca.

1. はじめに

テレビ、ラジオ、インターネットで日常的に数多くの英語学習の機会が提供され、また英語自習用教材が容易に入手できる現在にあっても、多くの学生にとって主たる英語学習の機会、教室での授業ではないだろうか。金沢大学では、新入生約 1800 名のほぼ全員が共通教育言語科目「英語 I」を履修する。¹ 大半の学生は、週に 2 コマ、英語 I を受講する。1 コマ 90 分の授業ではあるが、多くの学生にとって授業が唯一あるいは主たる英語学習の機会であるとすれば、週 180 分という授業時間をどのように運営するかによって、授業の効果は大きく変わる。

¹ 「ほぼ全員」としたのは、なかには英語 I が容易すぎて、英語 II や英語 III を履修する学生もいるからである。

英語 I の効果的運営にかかわる問題の一つとして、教室での使用言語がある。「英語の授業は英語でおこなうべきだ」「日本語で説明する方が学生の理解度が高い」「英語学習の初期段階は日本語での説明を交えつつ、徐々にイマージョンにすればよい」等等、教室の使用言語に関する意見はさまざまであり、また専門家の見方も一元化していないようである。授業をとおした外国語習得、すなわち教室第二言語習得(classroom second language acquisition, 教室 SLA)の成果をあげるためには、教室での使用言語をどのようにデザインすればよいのだろうか。小稿では、英語 I 受講生の一部を対象におこなったアンケート調査の結果を分析し、教室 SLA における使用言語について検討する。それによって、教室使用言語からみた英語 I の現状と課題を洗い出し、今後の方向性を探りたい。

2. 英語 I の概要

英語 I は、「高等学校卒業程度の基礎的な英語学力を前提として、スキル別にその学力をさらに伸ばす」という全体的到達目標のもと、スキル別に四つに分類されている。英語 I(コミュニケーション A)はネイティブ教員が担当し、それ以外の授業、すなわち英語 I(コミュニケーション B[リスニング中心])、英語 I(コミュニケーション B[ライティング中心])、英語 I(リーディング)は、日本人教員が担当している。ネイティブ教員による英語 I(コミュニケーション A)は、到達目標のひとつが「英語でコミュニケーションすることの経験を深める」ことにあるので、授業の大半以上が英語でおこなわれている。一方、日本人教員担当の授業は、(1)教材中の英語を除き授業は日本語でおこなわれるモノリンガル、(2)教室言語として英語と日本語を使用するバイリンガル、(3)授業をすべて英語でおこなうイマージョン、の三タイプに分けられ、どのタイプを選択するかは教員の裁量に委ねられている。

3. 調査の実施と結果

3-1. 調査方法

本調査は、2007 年 1 月下旬、英語 I の授業時間内におこなった。実施時期が後期終了間際であったため、調査実施可能なクラスが限られ、全受講生を対象とすることはできなかった。調査アンケートの配布と回収は授業担当教員がおこなった。

3-2. 調査対象クラス

調査対象クラスの内訳は次のとおりである。

| | 授業形態 | 担当教員 | 対象学部 | 回答者数 |
|------|---------|-------|-----------------|---------|
| I | バイリンガル | 日本人教員 | 文学部・法学部 | 38 |
| II | バイリンガル | 日本人教員 | 教育学部・経済学部 | 29 |
| III | バイリンガル | 日本人教員 | 工学部 | 39 |
| IV | バイリンガル | 日本人教員 | 理学部・医学部保健学科・薬学部 | 29 |
| V | モノリンガル | 日本人教員 | 教育学部・経済学部 | 30 |
| IV | モノリンガル | 日本人教員 | 工学部 | 34 |
| IIIV | イマージョン他 | 日本人教員 | 不特定 | 93 |
| | | | | 292(総数) |

3-3. 設問と回答結果

設問は全部で3つある。設問1は受講クラスのタイプを問うものであり、その結果は3-2に記したとおりである。設問2と3の内容と結果は以下のとおりである。

設問2

英語Iの担当教員と教室での使用言語に関して、次のいずれが最も良いと思いますか。ひとつ選んで記号を○で囲んでください。

| | 担当教員 | 教室の使用言語 |
|---|------------------|--------------------|
| A | すべて日本人教員 | 日本語 |
| B | すべて日本人教員 | 日本語と英語(バイリンガル) |
| C | すべて日本人教員 | すべて英語(イマージョン) |
| D | 日本人とネイティブ教員が半数ずつ | 日本人は日本語で、ネイティブは英語で |
| E | 日本人とネイティブ教員が半数ずつ | 日本語と英語(バイリンガル) |
| F | 日本人とネイティブ教員が半数ずつ | すべて英語(イマージョン) |
| G | すべてネイティブ教員 | すべて英語(イマージョン) |
| H | その他(具体的にご記入ください) | |

設問2 回答結果

| | A | B | C | D | E | F | G | H | 無回答 |
|---------|----|----|---|----|-----|----|----|---|-----|
| I | 0 | 9 | 0 | 2 | 22 | 4 | 1 | 1 | 0 |
| II | 2 | 4 | 0 | 3 | 18 | 2 | 0 | 0 | 0 |
| III | 1 | 3 | 1 | 4 | 25 | 3 | 2 | 0 | 0 |
| IV | 1 | 4 | 0 | 4 | 16 | 1 | 2 | 1 | 0 |
| V | 4 | 4 | 0 | 4 | 13 | 0 | 2 | 0 | 2 |
| VI | 4 | 6 | 0 | 7 | 13 | 0 | 3 | 0 | 1 |
| VII | 4 | 2 | 4 | 20 | 45 | 15 | 2 | 1 | 0 |
| 合計(292) | 16 | 32 | 5 | 44 | 152 | 25 | 12 | 3 | 3 |

H(その他)の内容は次のとおりである。

- ・すべてネイティブ教員／日本語と英語のバイリンガル(クラス I)
- ・日本人とネイティブと半数ずつ／文法を説明する授業は日本語、リーディングなどは英語(クラス IV)
- ・すべて日本人教員／何でもよい(クラス VII)

設問3

日本人教員が英語でおこなう授業(イマージョン、バイリンガルの双方を含む)に関し、あなたはどのように思いますか。該当するものをすべて選び、記号を○で囲んでください。

- A. 日本人教員の英語は、ネイティブ教員の英語より分かりやすいので、授業内容が把握しやすい。
- B. 教室では英語だが、教室の外では日本語で質問や相談ができるので、安心できる。
- C. 日本人教員が自信を持って英語を使っている姿を見て、良い刺激や励ましが得られる。
- D. 日本人教員の英語にはクセがあるので、授業が分かりにくい。
- E. 日本人学生に日本人教員が英語で授業をするのは不自然だ。
- F. ネイティブでない人の英語には接したくないので、日本語で授業をしてもらう方が良い。
- G. 国際社会ではネイティブ以外の人も英語を使うので、日本人教員が英語で授業をすることに抵抗はない。
- H. 英語Iでは、教員の国籍や母語はそれほど重要ではない。それぞれの状況にあわせて日本語や英語を使い、わかりやすい授業をすればよい。
- I. その他: _____

設問3 回答結果

| | A | B | C | D | E | F | G | H | I | 選択数 |
|---------|-----|-----|----|----|----|----|-----|-----|---|-----|
| I | 18 | 21 | 10 | 0 | 1 | 0 | 22 | 18 | 1 | 91 |
| II | 15 | 17 | 3 | 0 | 1 | 0 | 15 | 16 | 1 | 68 |
| III | 13 | 17 | 4 | 0 | 0 | 0 | 18 | 20 | 1 | 73 |
| IV | 9 | 14 | 7 | 0 | 1 | 1 | 15 | 17 | 0 | 64 |
| V | 17 | 11 | 3 | 1 | 4 | 0 | 8 | 6 | 0 | 50 |
| VI | 15 | 6 | 2 | 2 | 2 | 0 | 9 | 11 | 1 | 48 |
| VII | 41 | 41 | 14 | 7 | 11 | 15 | 36 | 33 | 2 | 200 |
| 合計(292) | 128 | 127 | 43 | 10 | 20 | 16 | 123 | 121 | 6 | 594 |

I(その他)の主たる内容は次のとおりである。

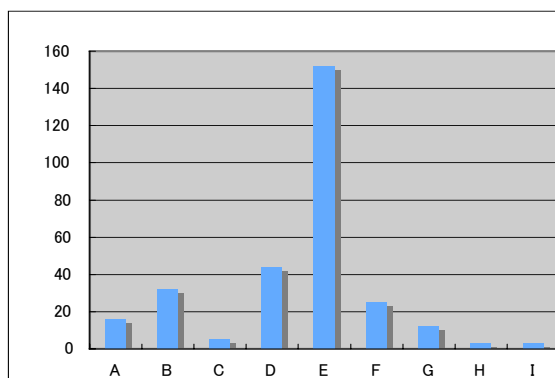
- ・きちんと英語のわかっている日本の先生であれば問題ないと思う。(クラス A)
- ・自分の英語力のなさがはっきりとわかるような授業をして、それを励みにしたい。(クラス VI)

4. 調査結果の分析

4-1. 担当教員と使用言語

設問2の結果をグラフ化すると一目瞭然であるように(グラフ1参照)、受講生が最も適切であると考えられる英語1の環境は、「日本人とネイティブ教員が半数ずつ」担当し、授業は「日本語と英語(バイリンガル)」でおこなうというものであった。

グラフ1: 設問2回答合計グラフ



日本人教員とネイティブ教員がともにバイリンガルで授業をおこなう形式を選んだ理由には、たとえば次のようなものがある。

- ・ネイティブの感覚をつかむために、ネイティブ教員は必要だと思う。ただ、文法などは日本人にしかわからない間違いもあるので、日本人教員も必要。英語に慣れるために英語の授業は必要だが、ついていけないと困るのでバイリンガルがちょうどよい。(文学部1年)
- ・すべて英語の授業だと分からない部分をそのまま聞き流してしまう場合も考えられるが、日本語と英語の両方を使えば的確な指示も与えやすいと考える。またネイティブ教員の授業は、ミニ留学のような授業を模擬体験できるので良いと思う。(文学部1年)
- ・できるだけたくさん英語に触れていたいことと、重要な説明は日本語で行ってほしいことを考慮に入れて。(文学部1年)
- ・ネイティブの先生の英語の発音は、やっぱり自分が考えている英語と全然ちがうし、聞いているだけでも勉強になる。けれど日本語の説明が全くないと、どうしても授業についていけないし、日本人の先生の日本人の目から見た説明もやはり自分には必要だと感じるから。(教育学部1年)
- ・すべて日本語だと英語の授業をやっている意味がないし、すべて英語だと何も聞き取れない人が授業についていけないから。(教育学部1年)
- ・日本語のみだと聞き取る力がつかないし、英語のみだと一度聞き取れない語が出てくると、ついていきづらくなるし、やる気もなくなってしまう。(教育学部1年)
- ・英語Iなら英語自体苦手だという人もいると思うので、日本語での説明がないと、授業全体の流れがわからないということもあり得ると思うので。(経済学部1年)
- ・できるだけ英語をたくさん聞くことのできる環境をつくるのが大切だと思うのですが、英語だけでは分からない部分もあると思うので、日本語を少し説明程度取り入れればよいのではと思ったから。(工学部1年)
- ・英語を勉強するときには、ネイティブの発音を聞きたいと思ったから。また、英語だけで授業を進められると、ついていく自信がないから。(工学部1年)
- ・基本的に授業は英語でおこない、本当に難しいところのみ日本語を少し使うとよいと思う。ネイティブが必要なのは、本当のネイティブが話す英語に慣れるため。(工学部1年)
- ・英語だけでは聞き取れなかったり、大切な情報を逃してしなうことがある。でも、ネイティブの英語にも慣れることが必要だと思うから。(医学部保健学科1年)
- ・日本語と英語を一度に聞けるから、わかりやすい。日本人とネイティブ両方からの英語の見方をみることができる。(理学部1年)
- ・日本人とネイティブ教員が半数ずつ、としたのは、ライティングとリーディングの授業では日本語をよく理解している日本人の方が、コミュニケーションの授業ではネイティブの方がそれぞれ適していると考えたからで、バイリンガルを希望するのは、説明がわからないと困るが、英語に触れる機会を多くしたいからである。(医学部保健学科1年)
- ・発音面に関してはネイティブ教員の方が生きた英語なのでよいと思うが、英語のみでの授業は意味の誤認をまねく危険もあるので、必要に応じて日本語も使うべきだと思う。だから、日本語がわかるネイティブ教員なら必ずしも日本人教員がいなくてもよいと思う。(2年)

このようにネイティブ教員と日本人教員双方がバイリンガルでおこなう授業を理想とする理由をみると、

次の三つの見解が学生に共有されていることがわかる。

- (1)発音はネイティブ教員に教えてほしい。
- (2)英語だけで授業がおこなわれると、理解できるか不安である。
- (3)文法説明など日本語を用いた方が効果的な場合がある。

以下、それぞれの見解について、英語 I を担当している教員の立場から、考えを述べたい。

ネイティブ教員に発音を指導してほしいという期待は、3-2 で述べるように、ネイティブ以外の英語に触れたくないという心理と部分的に符合する。見方を変えれば、学生には、いわゆる「正しい発音」へのオブセッションがあると考えられる。ネイティブのように英語を発音できなければいけないという意識は、英語学習の動機付けとして重要である一方、それが過剰になると、正しく発音できないから話すのが恥ずかしい(それゆえ黙ってしまう)という劣等感を植え付けることになり、結果的にコミュニケーションの妨げとなる。この劣等感は、ネイティブのように英語を話さなければならないという完璧主義的メンタリティと表裏一体の関係にある。日頃学生に接しながら、日本人学生がオーラルコミュニケーションを苦手とする(あるいは、英語をうまく話せないと思いついでいる)原因の一つは、この完璧主義にあるのではないかと思うことが少なくない。ネイティブのように「完璧に」英語を話すことができない限り、人前で英語を使うべきではない、という考え方に学生は洗脳されているのではないか。金沢大学での授業のみならず、英語圏の語学研修での日本人学生の様子をみていると、そのように思ってしまう。²

次に、できるだけ多く英語に触れていたい日本語による説明がないと不安だという学生の見解について検討する。英語だけでは不安だという心理は、理想的教室環境を問う設問2の回答で、「日本人とネイティブ教員が半数ずつ」担当し「日本人は日本語で、ネイティブは英語で」授業をおこなう形式が2番目に多く選ばれているという事実からも読み取れる。整理すると、学生の多くは、ネイティブ教員に「正しい発音」や「ネイティブの感覚」の指導を求める一方で、すべて英語でおこなうイマージョンクラスには総じて消極的である。

英語でおこなう授業を評価する一方で、なぜイマージョンクラスに対しては消極的なのだろうか。その理由として次の二つが考えられる。ひとつは、すべて英語でおこなわれると授業が理解できないという学生の自信のなさである。これは、見方を変えれば、授業内容を完全に理解しなければいけないというオブセッションと、それを生み出す完璧主義的メンタリティの根深さを示唆している。もうひとつの理由は、受講者の多様性と関連する。英語 I は事実上一年生のほぼ全員が履修しており、受講生のなかに

² 英語学習に関する日本人学習者の完璧主義的傾向は、2006年度前期におこなった英語 I 受講生の自己評価調査の結果にもあらわれている。

その調査では、自己評価の手だてとして、学生に、ヨーロッパ言語共通参照枠(CEF)の共通参照レベルを配布した。それにもとづき自分の英語力を評価してもらったところ、次のような見解が多く見られた。

- ・ 「自分の英語力に全く自身がなかったが、意外にも真ん中くらいのレベルの力は持っていることがわかり、少し安心した」
- ・ 「私たちは、本当は出来ることに対して、できないと言いがちである。それは、できると言ってできなかった時の失敗の恥ずかしさをいやがるからだと思う」
- ・ 「日本人は英語に関して完璧を求め過ぎなのだと思う。このような表を見ると、自分の英語力も捨てたものではないと感じる。誰もそんな大きなことを求めている。」

この調査から明らかになったのは、CEFの共通参照レベルのように到達目標が具体的に示されることで、学習者は自らの能力を相対的かつ現実的にとらえることができるということである。これが結果的に、学習者を「完璧な英語」という幻想から自由にする。このことは留意しておくべきだろう。

なお、この調査結果については、外国語教育研究センター2006年度第1回研究会(6月27日)で報告した。

は英語を苦手とする学生も少なくない。そのような学生にとって、イマージョンクラスは精神的にかなりの苦痛を強いる可能性がある。じっさいアンケート調査でも、英語を苦手とする学生が受講している事実に触れ、英語 I では日本語によるケアが不可欠だという意見があった。³

また、音声面は英語で、文法説明等は日本語で、と使用言語の使い分けを学生が求めているということに関しては、英語 I を担当する教員として首肯するところが大きい。英語を得意とする学生もいれば苦手な学生もいるという教室環境で、90 分という限られた授業時間を有効に使うには、文法説明や解説などは日本語でわかりやすくおこなう方がよいのではないかと。私自身は英語 I(中級基礎)を担当してそのように思う。自分が担当する英語 III はすべて英語でおこなうイマージョン形式であるが、英語 I では、とくに担当授業が中級基礎レベルだということもあり、指示や質問や簡単な説明をはじめとし授業の大半は英語でおこない、少し込み入った説明は日本語でおこなうようにしている。先に引用した学生のことばにあるように、すべて英語でおこなうと「ついていけなくなり」「やる気が失せる」受講生がいるという事実が、たしかに存在するのである。

調査結果から明らかになったこととして、次の二点を強調しておきたい。

(1) 学生はネイティブ教員と日本人教員の双方を必要としている。

(2) いずれの場合も、授業では英語と日本語を使い分けるバイリンガル形式が望まれている。

英語 I のレベルでは、学生は、英語でおこなわれる授業を求めつつも、すべて英語でおこなうイマージョン形式に不安を抱いていることがわかった。また、ネイティブ教員が担当する授業においても、日本語による解説を求める向きが大きい。たとえば、理想的教室環境として「すべてネイティブ教員」担当で使用言語は「英語と日本語(バイリンガル)」を選んだ学生は、その理由を次のように述べている。「……日本語で解説できないネイティブは役に立たない。わからないものを学習しに来ているのに、わからない言語で話されてもわかるはずがない。イマージョンに近いバイリンガルが望ましい」(法学部 1 年)。

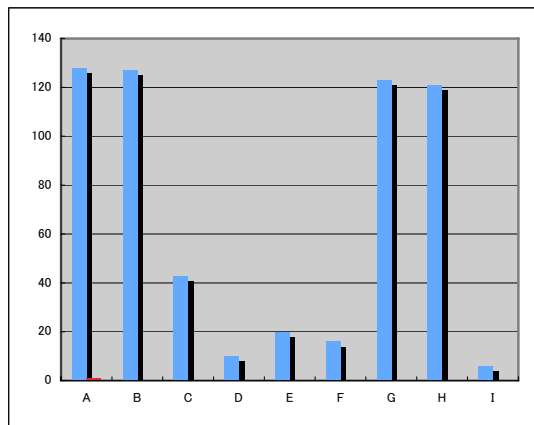
教室言語を英語にしてインプットを多くすることの利点のみならず、その問題点も慎重に検討する必要がある。そして今後、バイリンガルな授業形態を具体的に考察し、英語と日本語の目的別使い分けを考えていかなければならない。

4-2. 日本人教員が英語でおこなう授業

設問3は、日本人教員が英語でおこなう英語の授業に関する学生の反応を知るために立てた問いである。回答結果をグラフにすると次のようになる。

³ 2005年に英語C(現「英語III」)受講生を対象に類似の受講調査をおこなった際、日本人教員担当のイマージョンクラスへの反応はきわめて肯定的であった。英語IIIの受講生は自律した学習者が多く、事実上全員の履修が求められている英語Iの受講者とは異なる。そのような事実を考慮し、レベルや目的別の授業担当や教室使用言語について議論を重ねることは、四年一貫英語教育を具体化する上で不可欠であろう。

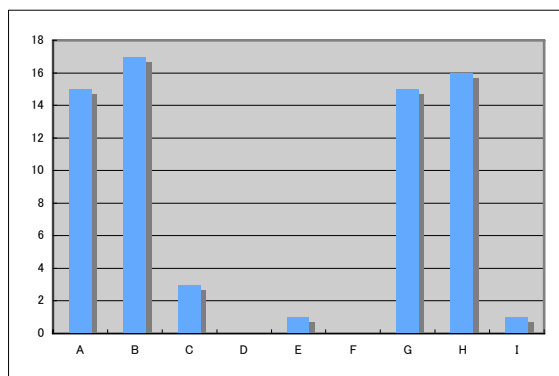
グラフ2:設問3回答合計グラフ



グラフ2で突出している4つの項目(A, B, G, H)は、いずれも日本人教員が英語を使用することに肯定的・好意的な反応を指す。A, B への反応の多さから、日本人教員の存在が受講生に安心感を与えていることがわかる。授業では英語を使っているが、授業の外では日本語で質問できるという安心感である。また、G, H が多く選ばれていることから明らかなのは、日本人教員の英語使用に接して、学生が国際語としての英語への認識を深めているということである。これはまた、先述した「正しい発音」へのオブセッションや完璧主義的メンタリティから脱する可能性が小さくないことを示唆しているように思われる。

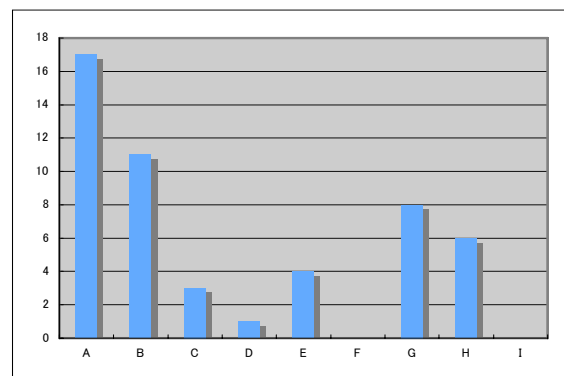
このように、総じて学生は日本人教員が英語を用いて英語の授業をおこなうことに肯定的である。この現象をさらに詳しくみるために、同じ学部構成の二クラスを比較してみたい。ひとつは、日本人教員担当のバイリンガルクラスであり、もうひとつは日本人教員担当のモノリンガルクラスである。それぞれのクラスの設定3への回答をグラフ3, 4に示した。

グラフ3



クラス II(経済・教育学部/バイリンガル)

グラフ4



クラス V(経済・教育学部/モノリンガル)

違いは歴然である。モノリンガルクラスよりもバイリンガルクラスの学生の方が、日本人教員が英語を用いることに肯定的である。また、モノリンガルクラスの学生の方が、日本人教員の使う英語を不自然だ

と感じる向きがあることもわかる。モノリンガルクラスの学生が日本人教員の英語に否定的な反応を示すのは、「正しい」「完璧な」英語のオブセッションに抑圧されているからなのか。それは断定できないが、しかし、バイリンガルクラスの学生の英語観がより多文化的で柔軟である要因に、この学生たちが日本人教員の用いる英語に日常的に接しているという事実があることはたしかだ。日本人教員が英語で授業をおこなうことは、英語をネイティブの言語ではなく国際語として認識させるはたらきをもつのではないか。いずれにせよ、日本人教員が英語で授業をおこなうか否かということが、学生の英語に対する意識を大きく左右することはまちがいない。

5. まとめ

今回のアンケート調査から、学生の立場からすると英語 I はバイリンガルクラスが理想的であることがわかった。これは、英語 I の主に中級基礎クラスを担当する教員として、私自身も同感するところが大きい。繰り返し述べているように、英語 I は一年生がほぼ全員履修する科目であり、受講生には英語を苦手とする者が少なくない。英語への苦手意識を助長しないような配慮が不可欠であり、その場合、学生が苦手とする英語よりは日本語を用いる方が効果的であるように思う。

一方、日本語によるケアが必要ならば、授業を日本語でおこなうモノリンガルクラスでもよいのではないかと当然考えられるだろう。しかし、4-2 で論じたように、日本人教員が英語で授業をおこなうことで、学生が柔軟な英語観を身につけ、「正しい」「完璧な」英語という幻想から自由になれる可能性が拓けてくる。このことの意味は大きい。国際語としての英語への認識を深めることは、多文化環境でコミュニケーションをとる上で不可欠であるからだ。

英語の授業には、英語力だけではなく、英語使用空間におけるものの考え方を養うことも期待されているはずである。その実現のために、日本人教員が英語でおこなう英語の授業が果たす役割は決して小さくない。

引用参考文献

- 鳥飼玖美子「持続可能な未来へのコミュニケーション教育」大津由紀雄『日本の英語教育に必要なこと—小学校英語と英語教育政策』135-51.
- 村野井仁「第6章 教室第二言語習得研究と外国語教育」『第二言語習得研究の現在—これからの外国語教育への視点』小池生夫編集主幹, 大修館書店, 2004.
- 結城正美「英語イメージンクラス(教養的言語科目)の現状と課題——受講調査の結果から」『言語文化論叢』10 (2006): 133-46.